

教材 ⑤	<h1>ラオスで活躍する日本人</h1>	
目的: 海外で働く可能性を身近に感じさせる。		
対象: 小学校高学年～高校生		
時間: 45分		
準備するもの: ラオスで活動する青年海外協力隊員や日本人の NGO スタッフのインタビューシート、写真、インタビュー映像		
学習の流れ		
時間(分)	学習者の活動	進め方とポイント
導入 (5分)	① 将来海外で働いてみたいかという問いに答える。 ② ラオスで活動している沖縄県出身者を写真やインタビュー動画で紹介する。	○海外で活動することをどのように思っているのか引き出す。 ○海外で活動することを身近に感じさせる。
展開1 (25分)	③ 4人一組のグループを作る。 ラオスで活動している日本人のインタビューシートを一人ずつ受け取り、黙読する。 それぞれ書かれていることを紹介しあう。 共通していること、気づいたこと、感じたことの意見を出し合う。 ○青年海外協力隊員インタビューシート 小藤田朋美さん(コミュニティー開発) 大村智子さん(数学教師) 高木とも子さん(助産師) ○NGO スタッフインタビューシート 加瀬貴さん(シャンティ国際ボランティア会) 大城洋作さん(難民を助ける会) 宇良一成さん(日本地雷処理を支援する会) ④ グループで出された意見の中で、特に全体で共有したい意見を出し合う。	○共通していることは、人として大切なことであることに気づかせる。 ○心に響いたことなどを共有
まとめ (15分)	⑤ 自分の進路、生き方について考える ⑥ 感想を書き、発表する。	

学習後の展開

- ・今できることや将来の職業について考えるきっかけとする。
- ・国際協力の必要性を考えるきっかけとする。



ことうだともみ

小藤田朋美さん

JICA 青年海外協力隊 コミュニティー開発隊員
藍染の布やラオラオ酒など村の特産品を作り売り出す方法を村人と一緒に考え、村を活性化させる活動を行っている。

① 青年海外協力隊に参加するきっかけは？

子どものころ、タイやインドネシアに住んでいたことがあり、その時に、ストリートチルドレンなど開発途上国の問題について自分でできることはないかと考えた。

開発途上国で働くために、大学も国際協力を専攻し、一般企業で務めてから青年海外協力隊に参加した。

② ラオスに来てよかったことは？

異文化体験ができていること。

知らない土地に来て、土地の人と話し合いながら仕事を進めて、生産者に「来てくれてよかった」と言ってもらえたこと。

③ ラオスで苦労したことは？

活動を始めたころラオ語が通じず、言いたいことが全く伝わらなかったこと。その結果、人間関係がうまくいけなくなった。1年たって、言いたいことが伝えられるようになり、とても楽しく活動している。

④ 日本に帰ってやりたいことは？

青年海外協力隊の活動が2年で終わり一旦日本に帰るが、また海外で活動をしたい。それは、日本の外にいと、日本を客観的に見ることができるから。

そして、日本の価値観だけでなく、海外の価値観の中でもっと可能性がある方法などに挑戦しながら、もう少し国際協力の活動を行って、その後日本でできることを考えたい。

⑤ 日本の子どもたちへメッセージ

周りの意見に流されず、自分がどうやって生きていきたいかを考えて、自分のやりたいことを実行して、自分色の人生にしていってほしい。そうすれば、すごく楽しい人生になると思う。



おおむらさとこ
大村智子さん

JICA 青年海外協力隊 数学教師
教員養成学校で数学教育の指導を行っている。

① 青年海外協力隊に参加するきっかけは？

沖縄で生まれ育ち、日本の教育を受けて教員になった。日本の教育に疑問に思うこともあり、他の国はどうなっているのかと考えた。そして、外国の教育事情をちょっと見てみたいと思って応募した。

② ラオスに来てよかったことは？

普段の生活の中で、人がとても優しいこと。
私のたどたどしいラオ語でも、一生懸命聞いて「こういうことだね」と理解しようとしてくれる。

③ ラオスで苦労したことは？

言葉の問題。英語も通じない。ただ、公共の場では英語は通じるので、もっとしっかり英語を勉強しておけばよかったと痛感している。

④ 日本に帰ってやりたいことは？

* 派遣されたばかりだったので質問していません。

⑤ 日本の子どもたちへメッセージ

日本では「ありがとう」「大丈夫だよ」「おはよう」など、何気ない会話が少なくなってきたらラオスに来て思う。そういう言葉を普段の生活から言うようにして、周りの人とコミュニケーションをとってほしい。



たかぎ　　こ
高木とも子さん

JICA 青年海外協力隊 助産師隊員

正しく安全な分娩介助に関する指導や地域での子どもの健康診断や母子手帳の作成など地域の母子保健向上に関する活動を行っている。

① 青年海外協力隊に参加するきっかけは？

知人がアフリカのケニヤで活動している様子を見て、開発途上国で助産師として活動したいと思った。その第一歩として青年海外協力隊を選んだ。

② ラオスに来てよかったことは？

東京で一人で暮らしていると、隣の人との交流もなかった。一方、ラオスではみんなが声をかけてくれ、村人の仲間に入れてくれて、田舎ののんびりとした空気と穏やかな人たちに囲まれて暮らしている。それがとてもいい経験となっている。

③ ラオスで苦労したことは？

あまりない。強いて言えば、ラオスの人々はたくさんお酒を飲むので、あまりお酒を飲めない私は“キンビア(ビールを飲むこと)攻撃“に立ち向かうことに最初は苦労した。パーティーには参加して仲良くなりたかったので、いかに顔を出して、いかに抜け出すかを工夫した。

④ 日本に帰ってやりたいことは？

ラオスの人々の子育ての仕方が素晴らしいので、その方法やシンプルな生き方を日本のお母さんに伝えたい。例えば、子どもが生まれるときは必ず家族がそばにいて、地域の人々皆で子どもを育てていく環境がある。それは、今の日本が忘れかけていることなので、そのとても大事なことを伝えたい。

⑤ 日本の子どもたちへメッセージ

若いうちに、自分が住んでいる以外の町に行って視野を広げてほしい。チャンスが巡ってきたらそれをつかんで離さないという気持ちも大切。今やっていることは必ず次の何かにつながっている。明るい未来を一緒に楽しもう！



か せ た かし
加瀬 貴 さん

NGO シャンティール国際ボランティア会
複式学級の指導法改善や読書活動の推進活動を行っている。

① NGO 活動に参加したきっかけは？

2001年9月1日のテロ事件をTVで見ながら、何もできない学生の自分がとても悔しかった。こういった事件の背景には貧困などの格差が原因の一つだと知ったので、開発途上国の支援をしていきたいと思った。だから、青年海外協力隊を経験して今のNGOに入った。

② ラオスに来てよかったことは？

ラオスの人が穏やかなところ。日本人と似ていて和を重んじる。そんなところに癒されている。

③ ラオスで苦労したことは？

解決しなければならない問題も、すぐ「ポーペンニャン(大丈夫、何とかなる)」で片づけられてしまうところ。課題を理解して、一緒に活動していくことが大事。

④ 日本に帰ってやりたいことは？

日本とラオスのつながりを紹介したい。例えば、日本の有名なカメラの会社の工場はラオスにある。ラオスと日本は経済的にも社会的にもつながりがあるが、日本人にはあまり見えていない。お互いの関係性を理解し、ラオスに共感できる関係を作っていけるお手伝いができればと思う。

⑤ 日本の子どもたちへメッセージ

たくさん遊んで、いろんな人と出会って、いろんな世界を見たり、知ってもらいたい。そして、日本をもっともっと好きになってほしい。



おおしろようさく
大城洋作さん

NGO 特定非営利活動法人難民を助ける会(AARJapan)
障がい者スポーツを推進する活動を行っている。

⑥ ラオスに来たきっかけは？

所属している NGO で障がい者の支援がしくて、それができるのがラオスだったから希望した。

⑦ ラオスに来てよかったことは？

まだ 30 歳だけど、みんなをまとめるマネージャーという立場で活動させてもらえていること(日本では今の年齢ではなかなかできない)。そして、ラオスの人々と交流しながら仕事ができること。

新たな視点から生まれた国を見て、日本の良さなどに気づいたこと。

⑧ ラオスで苦労したことは？

正直苦労はしていない。強いて言えば、大きな問題も「ポーペンニャン(大丈夫、何とかなる)」と言ってしまふところ。ラオスの文化も大事にしながらも問題解決をしていかないといけない。

⑨ 日本に帰ってやりたいことは？

ラオスに来る前に世界一周の旅の経験もしたので、海外にいて気づいたこと、感じたことを若い世代に伝えていきたい。例えば、自分のやったことに対して自分で責任を取るとか、そういった感覚は自立心や可能性を広げてくれると思うので、そういったことも含めて伝えたい。

⑩ 日本の子どもたちへメッセージ

沖縄は本土とは違った文化を持っているユニークな島だけれど、ずっと沖縄にいればそれは当たり前でしかない。だから、他の地域に出て、視野を広く持って、いろいろな人を受け入れられるようになってほしい。それが沖縄の将来を大きく左右していくと思うから。



うらかずなり
宇良一成さん

NGO 認定特定非営利活動法人

日本地雷処理を支援する会 (JMAS)

ラオスの不発弾処理機関 (UXO-LAO) で、不発弾処理の指導を行っている。

① ラオスに来たきっかけは？

自動車会社を経て自衛隊に入隊。沖縄の不発弾処理部隊に配属された。
沖縄で「ラオス・カンボジア不発弾シンポジウム」が開催され、いつか海外で不発弾処理の仕事をしたと思った。自衛隊退職後に JMAS のスタッフとして不発弾処理の指導のためにラオスに来た。

② ラオスに来てよかったことは？

以前 PKO で派遣された国々と比べて、とても治安がいい。
人間性もすごくいい。
食べ物も沖縄と共通するものが多い(ヘチマ、ゴーヤー、隼人ウリ、豚肉など)のでラオスでよかった。

③ ラオスで苦労したことは？

これと言ってないが、強いて言えば言葉に苦労することがある。ラオ語が話せないので、意思の疎通がうまくいかない時もある。

④ 日本に帰ってやりたいことは？

沖縄にもまだ不発弾がたくさんあるので、不発弾処理の NGO を作り、不発弾処理をしていきたい。

⑤ 日本の子どもたちへメッセージ

いろんな世界を見てほしい。そのために、よその国の言葉も勉強して、世界に羽ばたいてほしい。

